



TITLE:

貿易理論の前提

AUTHOR(S):

松井, 清

CITATION:

松井, 清. 貿易理論の前提. 経済論叢 1938, 46(4): 591-606

ISSUE DATE:

1938-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131082>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號 第四十六卷

昭和十三年四月一日發行

論叢

ソロキンの文化的變動形式論

文學博士 米田庄太郎

貨幣の本質とその價值

商學士 中山伊知郎

貨幣の本質について

文學博士 高田保馬

共同體思想の國民的性格

經濟學博士 石川興二

時論

稅制整理と増稅

經濟學博士 汐見三郎

研究

職分と職業

經濟學士 澤崎堅造

貿易理論の前提

經濟學士 松井清

ダンピングの理論

經濟學士 岡倉伯士

近世絞油業の發達

經濟學士 住谷勇二

說苑

明治初期の國內市場

經濟學士 堀江保藏

産業構造の研究と政策

經濟學士 田杉競

附錄

雜報：外國雜誌論題

(禁轉載)

貿易理論の前提

松 井 清

一 生産條件の國內的均等と國際的不均等

貿易とは國を異にする人々の間に行はれる商品交換であり、貿易理論はかかる事實のうちに存する合法性を明らかにしようとするものである。國を異にする人々の間に行はれる商品交換は、一國の内部に於て行はれる商品交換とは異つた様相を呈するものであり、その故に貿易理論は一般經濟理論に對して特殊の存在を主張し得る。然らば國際間の商品交換を國內のそれから異ならしめてゐる基本的要因はこれを何に求むべきか。吾々は貿易理論の研究に入る前提として先づこの點を明らかにしておかなければならぬ。

かかる基本的要因は一國内部に於ける生産條件の均等と國際間に於ける生産條件の不均等に求めらるべきである。¹⁾勿論現實には一國の内部に於ても生産條件の不均等は存在する。けれども理論の純粹な姿に於て一國内部の生産條件が均等とさるべきであると云ふことは古典派以來異論のないところである。之に反して國際間では理論の純粹な姿に於ても生産條件の均等を假定することは許されない。それは本質的に不均等であるとされてゐる。ところで生産條件は具體的には技術及び生産諸要素の價格を標識として認識することが出来る。技術は一國の内部では均等となるを常態とするに反し、國際間では若干の均等化の傾向があるにしても、依然として多分の不均等

を残存してゐる。吾々は今日に於てもなほ技術のアメリカ的水準・日本的水準を云々し得るのである。生産要素價格については更に強い程度に於てこのことが云へる。國際交通が著しく發達した段階に於ても、各國の勞銀が著しき差異を示すことは餘りにも顯著である。通常生産條件の優れた國の勞銀は高く、その劣つた國の勞銀は低い。更らにまた資本利子についても、高度資本主義時代に入つての國際資本移動の發達が國際間の均等化を促進するものとは云へ、未だ多分の不均等を残してゐるのである。生産條件はすべてかう云つたものの有機的結合から成立し、商品價格にその集中的表現を見出す。従つてそれは表面上の姿に於ては價格形成に於ける供給條件及び需要條件によつて決定されるが如く見えよう。²⁾けれども此所に於いてむしろより重要なのは供給及び需要が均衡したと假定され作用しないと假定された場合に於ける生産の諸條件である。

茲に問題としてゐる貿易理論の前提及びさう云つた前提の下に展開される貿易理論が直接の對照とするのは資本主義的生産方法の下に於ける貿易である。もちろん資本主義以前に於ても政治團體と政治團體との間の交換と云ふ意味に於ける貿易は存在した。特に重商主義貿易はそれが國民的規模の下に行はれ、且つ資本主義發生の足場を築いたと云ふ理由で吾々の研究にとつても無視し得ないものである。けれどもかう云つた謂はゆる前資本主義時代に於ける貿易は、資本主義時代に於ける貿易とは質を異にするものであり、³⁾それ自身極めて重要なものではあるが、理論の直接の對象とはならない。對象を歴史上に求むるならば、十八世紀後半に於ける英國の産業革命を先頭として各國に繼起した産業資本主義確立以後である。各國資本主義が獨自の型を持つことは、それらの間の生産條件に差異のあることを明示してゐると云へよう。この型は既に前資本主義時代に豫定されたものであ

2) 高田博士は次の如く云はれる。「私の云はんとするところはかうである。各固有の供給函數・需要函數を有するところの綜合經濟の間に經濟交通が行はれるとき、此交通の間に成立するところの價格の決定機構が如何なるものであるか、これと各綜合經濟がかかる交通なしに置かれた場合に成立する價格との聯關如何と云ふことを所謂國際價格の理論が目ざしてゐる」(前掲書 274頁)こゝでの問題は國際價格が問題となる以前の段階に屬する。

り、更らに高度資本主義時代をも特色づける。先進國と後進國との區別はかゝる型を一般的な形で二分したものである。

吾々は右の如き見解をとりながら以下に於て從來この領域でなされた諸説を検討することとしよう。その際歴史學派による國民經濟と國際經濟との區別は、その區別が一定の倫理的價值判斷を含んでゐるために當然除外されるべきである。また國民經濟と國際經濟との形式的・法的區別によるハルムス流の立場も問題とならない。吾々の問題とするのは國民經濟と國際經濟の經濟的區別であり、從つて吾々の検討は主として古典學派及びその後繼者の説に向けられるわけである。しかしそのことは或る場合に於て、例へば政策的な見地に於て、歴史學派流の區別が意味を持つこと、また他の場合に、例へば法的な見地に於て、ハルムス流の見地が意味を持つことを否定するものではない。

(註) 屢々引き合ひに出されると云ふ意味でハルムスの概念規定は引用に値しよう。彼は國民經濟及び世界經濟の概念を明らかにするために先づ個別經濟から出發して次の如く云ふ。『個別經濟とは、一つの經濟主體によつて指導された財貨の調達(保持)と使用の組織である。』次に國民經濟については『國民經濟とは、交通の自由と技術的な事情によつて可能にされ、同時に統一的な法律制度によつて規制され、且つ經濟政策的手段によつて促進されるところの、國家的に結合された民族の個別經濟間の關係、及びその關係の相互作用の全體である。』となし、更らに世界經濟については『世界經濟とは、高度に發展した交通制度によつて可能にされ、且つ國家的國際條約によつて規制され促進されるところの、地球上の個別經濟間の關係及び其關係の相互作用の全體である。』と云ふ。周知のようにハルムスの意圖するところは、歴史學派に反對して國民經濟と國際經濟(彼自身の語では世界經濟)の客觀的な區別を樹立するにあつた。けれどもそれがあくまで法的な區別に立脚する限り吾々の問題と直接の聯關を持つものではない。吾々の問題にするのは、正にヴェーラーの指摘した如く、經濟的な區別である。經濟的と云ふとき人々は直ちに古典派及びその後繼者達の萬民主義的立場を想起するであらうが、吾々の解するところでは必

- 3) 谷口吉彦博士：國際經濟の理論と問題 2 頁 參照。
- 4) ハルムスの學說については生島廣治郎教授の詳細な研究がある。「ハルムスの世界經濟概念の再検討」(國民經濟雜誌 63 卷 6 號)
- 5) B. Harms: Volkswirtschaft und Weltwirtschaft (Probleme der Weltwirtschaft VI) 1912, S. 94.
- 6) B. Harms: a. a. O. S. 100.

らずしもさうでない。經濟が單に自然的なものではなくして社會的なものである限りに於て國際間には質的な區別が嚴存すると云ふべきである。それはイギリス資本主義ドイツ資本主義と云ふとき吾々の頭に浮ぶような質的な區別なのである。

二「勞資の國內的移動性と國際的非移動性」を主張する説

既に明らかであるように、吾々の見解からすれば貿易理論に必要な前提は、一國內部に於ける生産條件の均等と國際間に於けるその不均等とである。かゝる差別を古典派は一國內部に於ける勞資の移動自由と國際間に於ける不自由に於て認識したのであるが、この見解は吾々のそれと如何なる關係にあるだらうか。それを明らかにするために古典派自身に於ける主張の變遷をや、詳細に觀察しよう。

リカードは彼れの有名な原理の第七章に次の如く書いてゐる。『同じ一國の内に於ては利潤は大體に於て同一水準にあるか、或ひは僅かに資本使用法の安固・不安固と快・不快とに應じてのみ差等のあるものである。異なる諸國の間にあつては、趣を異にする。若しもヨオクシヤに於て使用せられる資本の利潤が、ロンドンに於て使用せられる資本の利潤を超過することあらば、資本は速かにロンドンからヨオクシヤに移動すべく、其結果として利潤の均等が實現せられるであらう。併し乍ら假りに資本と人口の増加より起るイギリスの土地生産率の減退の結果、賃銀が騰貴して利潤が下落することがあつても、資本及び人口は必然イギリスからオランダ、スペインまたはロシアの如き、利潤の高かるべき處へ移動すると云ふ結果は起らぬであらう。』¹⁾そしてこのような前提が存在するが故にこそ『一國內に於て諸貨物の相對價值を支配する同じ規則は、二國若くは其以上の國の間に交換せ

7) B. Harms: a. a. O. S. 106.

8) Vgl. E. Böhler: Der klassische Begriff der Weltwirtschaft (W. A. 22 Bd. 1925) S. 10 ff.

9) Vgl. W. M. Kotschnig: Weltwirtschaft und Universalökonomie (W. A. 22 Bd. 1925) S. 205.

1) D. Ricardo: Principles of Political Economy and Taxation (ed. by Gonner)

られる諸貨物の相對價值を支配するものではない。²⁾と彼は云ふのである。かうしてリカード貿易論の樞軸を形成する比較生産費説は、あたかも勞資の移動性と云ふ事實そのものに立脚するが如き外觀を呈せるため、爾來論争はかゝる事實が存在するや否やについて争はれることになつた。換言すれば勞資は國內に於て果して完全自由に移動するか、國際間に於てはその移動性が全く缺けてゐるかが検討されることとなつたのである。それらの點についてリカードに續くジョン・スチュアート・ミルは次の如く述べてゐる。『もしも資本が世界の遠く隔つた部分へ、同じ都市の他の部分へと同じ程容易に且つ僅かの誘引を以て移動するならば、もしも人々が出費の僅かのパーセンテージを節約しうる如何なる時でも彼等の工場をアメリカや支那へ輸送するとするならば、利潤は世界全體を通じて同様となり、すべてのものは同じ勞働と資本が最大多量に最も良質に於て生産するであらう場合に於て生産されるであらう。かゝる状態への傾向は現在に於ても見られはする。資本は次第次第に萬民的となりつゝある……しかしなほ地球上の異つた部分の間には勞銀についても利潤についても異常な相違が存するのである。³⁾』それ故にすべての遠隔地間に於ては或る程度まで、だが異つた國々の間では特に（同じ主權の下にあると否とに拘らず）、勞働及び資本の報酬に非常な不均等が存在し、而もなほかゝる不均等を除き去る程に大量の勞資の移動を引起さない。⁴⁾』ミルに於ける變化は、一方に於て資本の國際的移動が認められた點と、他方に於て移動性の區別は必らずしも國際間のみに限らず、遠隔地間にも存在するとされた點である。國際間の商品交換の原則を説明するものとしての比較生産費説は、やゝ異つた程度に於て國內の遠隔地間をも支配する。即ちミルに於ては國內と外國との區別は近接地 (adjacent place) と遠隔地 (distant place) と云ふ單なる程度的な差異に解消せ

p. 114 小泉信三氏譯 188頁-189頁。

2) D. Ricardo: *ibid.* p. 113 小泉氏邦譯 118頁。

3) J. S. Mill: *Principles of Political Economy* (Ashley's ed.) p. 575.

4) J. S. Mill: *Principles of Political Economy* (Ashley's ed.) p. 575.

しめられて終つてゐるのである。更らにミルに次ぐ第三の古典派學者ケアンズに於て如何なる見解が提出されたかを見よう。ケアンズは次のように云つてゐる。『經濟學の議論に於て一般になされてゐる假定は、同一國內の職業及び地方間には資本及び勞働の移動性が完全であるに反し、國と國との間に於ては勞資は移動しても非常な困難を伴ふか或ひは全々移動し得ない、と云ふのである。嚴密に云へばこの假定は二つながら主張され得ない。資本が——少くとも生産的目的のため使用されうる購買力の形態に於て存在する限り——同一國內のすべての職業及び地方間に自由に移動することは成る程眞實である。けれども勞資は吾々の知れる如く或る點に於て妨害に遭遇する。産業の低い階梯に屬する勞働者は、彼等の地位の還境から彼等より上位にある勞働者との競争に入ることゝ妨げられてゐるし、他方に於て同じ産業層にある勞働者にとつても遠隔の地方への移動に對する障害はかなりの程度に上つて居り、時には實際的にみて不可能である。資本は或る意味に於て一日一日非國民的或ひは萬民的となりつゝある。そして勞働は資本と同様に萬民的と云ふわけにはゆかないが、それでもかなりの移住が行はれてゐることを以てすれば……經濟的な原因の下に於て勞働が大規模に國際的移動をなしようと云ふことを否定するわけにはゆかない。⁵⁾』かくの如くケアンズは國際間に於ても勞資の或る程度の移動が行はれることを指摘すると共に、國內に於ても謂はゆる無競争集團 (non-competing group) が存在し勞働は必らずしも自由に移動し得ないことを明らかにした。けれどもそのことを以て貿易理論が成立しなくなると云ふのではない。彼は更らに進んで次の如く云ふ。『教義が實際に要求するのはこのことではなくして、實質的にそして一般的に産業的競争を妨げるような程度の移動に於ける困難である。⁶⁾』ケアンズによれば、産業的競争が充分行はれる程度の移動性が

5) J. E. Cairnes: Some Leading Principles of Political Economy, 1874 p.p. 302-303

6) J. E. Cairnes: ibid. p. 303.

あれば兩地域間に勞銀・利潤の均等化が結果するが、かゝる程度の移動性のない時には均等化が行はれず、その場合に初めて特殊の理論としての貿易理論が要求されることになる。貿易は國と國との間の商品交換と云ふよりも更に廣く無競争集團間の取引であるとされたのである。

右に於て吾々はリカード、ミル、ケアンズの見解の詳細な引用を行つたが、それはこの三人の學者によつて提出さるべき問題が殆んど提出し盡されてゐるためである。そして以上の觀察によつて、古典派貿易論の前提として知られてゐる「勞資の國內的移動性と國際的非移動性」がそのまゝの形で與へられてゐるのはリカードのみであることが明らかとなつた。ミルに於ては國際間に於ける資本の移動性が認められてゐるし、ケアンズに於ては國內に於ける勞働の非移動性が認められてゐる。かくて國內と國際間とは單に程度的な差異が存するのみであるとされ、貿易は國際間の商品交換と云ふよりも遠隔地間の取引(ミル)或ひは無競争集團間の取引(ケアンズ)とされるに至つたのである。なるほど勞資の移動性なる事實そのものに固執するときは、古典派自身の變遷が示してゐるように、單なる程度的な差異があるに止まることとならう。けれども問題は勞資の移動性なる事實そのものにあるのではない。吾々は貿易論の前提を國內に於ける生産條件の均等と國際間に於けるその不均等であると規定したが、勞資の移動性は生産條件の均等不均等を變化せしむる限りに於て問題となるのである。換言すれば國際間に生産條件の不均等を解消するに足るほどの勞資の移動が行はれるや否やが問題であり、國內に生産條件の均等を妨害するに足るほどの勞資の非移動性が存するや否やが問題なのである。そしてこのことが資本主義の發展に即して検討さるべきであることは勿論である。謂はゆるマニユファクチュア時代、産業資本主義の低度の發

展段階に於ては、資本は企業家の人格と密接に結びついてゐたため、勞働の國際的移動を妨げたと同じ原因——風俗・習慣・言語・道德・宗教・法律・政治等の差異——が資本の國際的移動を妨げたのである。然るに資本主義が高度化して高度資本主義の段階に達すると、國際證券市場が發達して資本は完全に人格から分離され、從つて移住の困難は資本移動を妨げる原因となり得ない⁷⁾。それどころか移住の困難やこの時代に至つて著しくなる商品貿易上の種々の障害は、却て資本移動を促進する傾向をすら持つのである。ミルやその他の論者によつてリカードに加へられた批判はあたかもかゝる事實を念頭に置いたものと思はれる。しかし乍らこのことを以て國際間に於ける生産條件の差異が完全に解消せしめられるであらうか。なるほど資本の移動は國際間に於ける利子率の差異を均等化する傾向を持つ。そしてその限りに於て生産條件も均等化されるであらう。けれどもその他に吾々は勞銀をも考慮に入れなくてはならぬ。勞働の國際的移動は資本よりも遙かに困難であり、且つまた勞銀は各國に存する社會的諸原因によつて影響を蒙ることが多いから、國際間には多分の勞銀差異が存してゐる。更らに各國の自然的條件をも無視することは許されない。技術の發達とその國際化が自然的條件の持つ意義を小ならしむるものとは云へ、未だ各國の自然的條件を完全に無意義ならしめてはゐない。要するに國際資本移動の存在は、リカードの如き形で提出された前提の反駁にはなるにしても、貿易理論に眞に必要な前提を否定することにはならない。次に國內に於ける勞働の非移動性について考へよう。その際注意すべきことは、一見勞働の非移動性に見えるような事態であつても、それが必らずしも生産條件の均等化に對する妨害とならないような場合の存することである。例へば、ケアンズがリカードに對する反駁として用ひた無競争産業集團間の勞銀差も、それが職業

7) R. Nurkse: Internationale Kapitalbewegungen, 1935 S. S. 6-7

を異にする労働者間の労働差を取扱つてゐる限り、生産条件の均等化に對する反駁とはならない。ついでに此處で同じ職業を持つた労働者間に於ても労働の差等が存しうることを證明しようとしたウィリアムスの説に言及しておこう。⁹⁾ 彼れは古典派貿易理論を批判する論文中に於て、北米合衆國に例をとりつゝ實證的研究を行つてゐるのである。即ち一九〇七年の A Bulletin of the U. S. Bureau of Labour は、一九〇六年に於ける北米の北部大西洋・南部大西洋・北部中央・南部中央及び西部諸州の五十種の職業に於ける賃金を掲げてゐるが、その結果によれば、北部南部及び西部に於ける労働はすべての職業に於て著しく異なる。最も接近してゐるのが、北大西洋諸州と北部中央諸州とであるが、それでもなほ四十パーセントの開きがあるとしてゐる。ケアンズが職業を異にする労働者の労働差を取扱つてゐるに對し、ウィリアムスは同じ職業の労働差を問題としてゐる點が注目されるべきである。何故ならば一國內に於て異つた職業間に存する労働差は一應複雑度の異つた労働として解釋がつくとしても、それが職業を同じくする場合には直ちにさう云つた解釋を下すことは許されないからである。右の例は主として白人労働と黒人労働との差異に立脚するものらしく、正にウィリアムスの指摘する如く、この場合は労働に關する限りあたかも國際間の如き様相を呈してゐるのである。しかし乍らその他の點——國際間に比して遙かに自由なる資本移動、技術・自然的條件の類似等——を考慮に入れるならば、吾々はその際とても依然として國內に於ける生産條件の均等を云々し得るのである。要するに國內に於ける生産條件の均等と國際間に於けるその不均等とは、資本主義の發展につれて若干の修正を受けるにしても、またその他の例外的條件によつて歪曲を受けるにしても、依然として存続するものと云ふことが出來よう。リカードはかゝる前提を勞資の國內的移動性及

8) J. H. Williams: The theory of international trade reconsidered (Economic Journal 1929, p.p. 195-209)
大泉行雄氏: 古典派貿易理論への一批評 (國民經濟雜誌昭和五年下 四十九卷) 參照。

び國際的非移動性なる事實そのものに存するが如き形で提出したため、ミルやケアンズの批判を蒙り、國內商業と國際貿易との差異は單に程度的なものであるにすぎぬとされるに至つたのである。しかし乍ら以上のように考へるとき、それは決して程度的な差異ではなくして質的な相違に立脚することは明らかである。従つて貿易を遠隔地間の取引としたり、無競争集團間の取引としたり、或ひは最近オーリンがなした如く⁹⁾地域貿易とするのは適當でないように思はれる。

(註) リカードの前提は既に觀察した如く古典派内部に於ても幾多の批判を蒙つたが、その後一部の論者によつてはそのまゝ受け繼がれることになつた。例へば古典派理論の諸前提について専門的な研究を行つたバジヨットも結論に於てはリカードと同様であるらしく、『經濟的意義に於ける國家とは、その内部に於て勞働及び資本が自由に移動する生産者の集團である。』と云つてゐるし、貿易論の最初の體系的著述者とも云ふべきバステューブルも多くの反對論を検討批判して後結局リカードの前提を認めてゐるようである。¹¹⁾これらの議論が如何なる點で批判さるべきであるかは以上述べたところから總て明らかな筈である。此處に言及しておくべきは『けれども吾々は、古典派によつて想定された諸前提が今日もなほ存するかどうか、あるひは特定の時代に存在してゐたかどうかと云ふ經驗的問題と、この様な前提の下に打ち樹てられた一般的命題が正しいかどうかと云ふ理論的問題とを區別しなければならぬ。』と云ふハーバラーの主張である。このハーバラーの主張が成立つためには、リカードの理論がリカードの述べた如き前提にではなく、經驗的な事實と矛盾しないような何らか別の前提に立脚することの證明が必要である。そうした證明を缺く限りに於てハーバラーの主張は正しくない。

三 「運送費の差異」を主張する説

ミルに於て國內と國外との區別が近接地と遠隔地との區別となり、貿易が遠隔地間の取引であるとされるに至

9) B. Ohlin: Interregional and international trade, 1933.

10) W. Bagehot: Economic Studies, p. 240.

11) C. F. Bastable: Theory of international trade, 1897 1st Chap.

11) G. Haberler: Der international Handel, 1933 S. 3.

松井・岡倉共譯: ハーバラー國際貿易論上卷 5頁。

つたことは既に明らかにしたところである。このミルの主張のうちに含まれる傾向の更らに極端化したものとしてシデウィツクの見解を擧げることが出来る。彼は國內商業と國際貿易との區別を運送費の存在しないとするに求めようとしたのである。吾々は古典派理論に於ける一變種としてかゝる説にも一瞥を與へておく必要がある。

シデウィツクは、國內に於ける商品價值は生産費によつて決定されるに反し國際間に於ける商品價值は相互需要によつて決定されると云ふミルの見解の批判から出發する。『この相互需要の均衡は疑もなく國際貿易に於ても國內商業に於けると同様に實現される傾向にある。けれども私は生産費が前の場合には全々考慮外におかれ、後の場合には考慮に入れられると云ふミルの見解には賛成しえない。』¹⁾彼は商品價值が國際間に於ても生産費によつて決定されることを證明するために、貿易財である衣服・葡萄酒の外に國內財である穀物の存在を假定する。然る場合には英國に於ける衣服及び穀物の相對價值は生産費によつて決定されるし、スペインに於ける葡萄酒と穀物の相對價值も生産費によつて決定される。運送費が存在しないとすれば、葡萄酒と衣服の價值が貿易によつて變化を蒙ると云ふ何らの理由も見出されない。相互需要の均衡は實現されるけれども、國內財の存在を假定する以上、それは國際價值に對して決定的な意義を持ち得ない。何故ならば葡萄酒が全部的に衣服によつて支拂はれることは最早ありえないからである。こうしてシデウィツクは運送費の存在こそ國際價值から區別するものであると云ふ。『國際價值の決定を説明する場合には、吾々は商品を外國に運送する費用のみならず、その對價を何らかの形に於て國內にもたらず費用をも考慮に入れなければならぬ。もしも吾々がこの二重の運送費を考慮に

1) H. Sidgwick: The Principles of political economy, 1901 p. 212.

入れるならば、吾々は運送費用を含んだ生産費が貿易される生産物の價格に對して重要な關係を持つことを知るであらう。²⁾『シヂウィツクの主張にはミルの物々交換說に對して貨幣費用を以て問題を取扱ふべしと云ふことが含まれ、³⁾そのことと運送費の重視とが相關聯してゐるのであるが、いまは唯直接の問題である運送費の重視のみを取扱ふことにしよう。運送費を以て國際貿易と國內商業とを區別しようとすれば、それは結局程度の差を問題にするにすぎなくなると云ふことは自明である。國內に於ける交通ですら運送費を無視することは許されないのである。否或る場合には國內に於ける運送費の方が國際間に於けるよりも遙かに大であるとすら考へられる。同じ北米合衆國の太平洋岸から大西洋岸に至るに要する運送費は、合衆國の大西洋岸から大西洋に面するヨーロッパの港に至る運送費よりも大であると云はれてゐる。英國の如く本國の面積が狭く從つて國內運送費が國際運送費よりも明瞭に小である場合には、運送費が國際貿易を特色づける一指標とならう。そしてその場合貿易理論が運送費に特別の關心を拂ふことは吾々もこれを否定しはしない。けれども運送費の大小はあくまで國內商業と國際貿易の本質的でない區別に關する。

四 「本位制の差異」を主張する説

最後に貿易理論の正統派(古典派及びその後繼者)によつてではないが、特に最近に至つて屢々主張される説に言及しておこう。それは本位制の差異を以て國際貿易を特色づけようとする説である。例へば「外國貿易及び外國貿易政策」¹⁾なる彪大なる書物の著作者オイレンブルグは次の如く述べてゐる。『むしろ國內商業と國際貿易とを決

2) II. Sidgwick: *ibid.* p. 214.

3) Vgl. J. Viner: *The Doctrine of comparative cost* (W. A. 1932 Okt. S. 376).

1) F. Eulenburg: *Aussenhandel und Aussenhandelspolitik*, 1929.

定的に區別する他の經濟的區別が存在する。それは經濟過程に本質的な影響を與へ且つ他國のそれに相應する制度から明確に區別されるような特質を持たなければならない。それは一國の本位共同體、本位貨のうちに與へられてゐる。それは經濟過程を統一的に總括し、同時に個々の過程を同一の一般的稱呼に歸屬せしむる。本位貨の限界は同時に國家の限界でもある。……特殊の國民國家的貿易の行はれるための前提は貨幣及び本位關係の統一である。……國家が共通の金の基礎を持つと云ふことは事態を變化せしめない。そのことは或る程度の均衡と類似とを形成しはするが、それにも拘らず一國內部の本位制度は他國のそれとは區別される。²⁾『表面的に本位貨の差異が國際貿易を特色づけてゐることはなるほど事實である。國の限界を越えて行はれる商品交換の結果の價值移轉は、國內のそれとは違つて、貨幣單位の交換と云ふ特殊の現象を伴つてゐる。爲替相場は一國の對外經濟關係を統一的に他國のそれと區別してゐるかに見える。このことから一國に共通な物價水準、「購買力共同體」の觀念が生れる。しかし乍らこのことは果して國際貿易を特色づける基本的な要因であらうか。吾々はこれに對する反對根據として、オイレンブルグの否定にも拘らず。世界貨幣たる金の存在を擧げることが出来る。各國が異つた本位制をとり、その本位貨と本位貨との交換比率が如何なる割合にあらうとも、金の存在は各國の經濟を常に同一の基礎の上に立たせ、價值の移轉を根本的に保證してゐる。恐らくオイレンブルグの如き見解は各國の金輸出が停止され、爲替相場が平價から背離せる最近の事實に着目して生れたのであらう。類似の見解をとるレベケは、本位制の差異が國際貿易を特色づけるのは、金本位制を離れた各國の本位貨が動搖を示す場合のみであることとわつてゐる。³⁾ その場合には各國に特有な割引政策がそれぞれの本位貨の動きを極めて特色あるものたらし

2) F. Eulenburg: a. a. O. S. S. 8-9.

3) W. Röpke: Geld und Aussenhandel, 1925 S. 32.

めてゐるのである。併し乍らその際とても各國は完全に共通の地盤を喪失して終つてゐるであらうか。答は否である。個々の價值移轉に於ける金の役割は失はれても、さう云つた移轉に於ける究極の差額がやはり金によつて決濟されてゐることを見れば、一應本位貨の獨自性があるように見えながら、それが單に表面的のものにすぎぬことが分る。本位貨の差異及びそれに伴なう爲替現象が國際貿易の表面的な特色をなし、國際貿易論がこの現象の研究に大なるスペースを割いてゐることは事實であるとしても、それは國際貿易を國內商業から根本的に區別するものではない。

五 要

約

國內商業は一國の内部で行はれる商品交換であり、國際貿易は國家と國家との間に行はれる商品交換である。或ひは國內商業は一國を舞臺として行はれるものであり、國際貿易は世界を舞臺として行はれるものである。そこで人は國民經濟と世界經濟との概念を規定することによつて國內商業と國際貿易の區別を明らかにしようとする。けれどもさう云つた單に觀念的な概念規定を行ふことは何らの意味も持たない。少くとも貿易理論の實質的な内容はさう云つた概念規定との必然的な聯關に立つものでない。かゝる見地から吾々は先づ歴史學派の方法を排除する。歴史學派は一定の倫理的價值判斷から國民經濟の概念を規定しようとしたからである。また國民經濟と世界經濟との法的區別に立脚するハルムス流の方法も此處では問題とならない。吾々に必要なのは經濟的區別であり、吾々はそれを國內に於ける生産條件の均等と國際間に於ける生産條件の不均等であるとした。そして

この様な區別づけが、古典派及びその後繼者の區別づけ、更らには最近に於ける若干の論者の區別づけと如何なる點で異り、且つ如何なる關係を持つかを明らかにすることが本論の課題を形成したのである。

古典派の「勞資の國內的移動性及び國際的非移動性」なる主張は、生産條件の國內的均等及び國際的不均等なる眞に必要な前提を單に表面的な事實に於てのみ認識した點で不充分であつた。貿易理論の前提としてかゝる事實のみに固執するならば、それは國際間に資本移動が存在すると云ふ、或ひは國內にも勞働の非移動性が存在すると云ふ舉證によつて直ちに成立しなくなつて終ふのである。さうではなくて吾々に必要なのは國內に生産條件の均等を妨害するほどの非移動性が存するか、また國際間に生産條件の不均等を解消するに足るほどの移動性が存するかを検討することである。かゝる點を検討するならば、貿易理論に必要な前提が今日に於ても依然として存在することが明らかとなるであらう。尤も國際間に於ける資本移動の存在は從來の貿易理論に修正を必要とせしめるであらう。貿易理論はこれまでの慣例を破つて資本移動に伴ふ諸現象の究明をも自己のうちに含まなければならぬ。

次いで吾々は運送費の存在を以て貿易を特色づけんとしたシデウィツクの説を検討した。この考の萌芽は國內及び外國なる言葉に代へて、近接地及び遠隔地なる言葉を用ひたミルのうちに既に與へられており、その極端化したものであるから古典派の一變種とも云ひ得るのである。この區別が本質的な區別を問題とせず、單に程度の差を問題としてゐることについては多言を要しない。國內商業に於ても運送費を無視することは許されない。

吾々は更らに「本位制の差異」を主張する學説を検討した。この派は古典派及びその後繼者とは異なるものでは

あるが、それが一應經濟的區別に立脚すると云ふ點で問題にする必要があつたのである。國際間の價值移轉は國內とは違つて異つた本位貨の交換なる一行爲を伴ふ。外國爲替及び爲替相場の存在は貿易を特色づけるものであるかに見え、この現象が「本位貨の差異」を主張する説の據り所であるように思はれる。吾々はこの説に對する最も手近な反對根據として世界貨幣―地金の存在をあげた。人々の目を眩惑せしめる表面上の諸現象の奥に横はる世界貨幣の機能を見究めれば、本位貨の差異が國內商業と外國貿易とを區別する本質的な差異でないことが明らかとなる筈である。

かうして吾々は生産條件の國內的均等と國際的不均等なる貿易理論の前提こそが本質的なものであるとするのであるが、そのことは勿論表面上の諸現象を論するに當つての諸説の妥當性を否定することにはならない。運送費が貿易理論に於ける特別の關心を集める段階の存在すること、また本位制の差異によつて生ずる諸現象の究明が貿易理論に於て重要な役割を果すことは吾々とても勿論これを認めるのである。